

故去澤徽先生追悼錄





在りし日の面影



吉澤
英生
齋

先生諱、徹吉澤氏曲川ト野長野縣人、早歲東
都、遊ヒ英學ヲ修ム、人ト為リ、聰慧俊敏、尤モ辯論
ニ長ス、初メ職ヲ愛媛縣立松山中學校及ヒ愛媛縣
立松山商業學校ニ奉シ、後東京府立第三商業學校
ニ轉ス、昭和三十二年一月東京府立第三商業學校
ニ任ハレ、初代校長ニシテ、十三年得テ遂ニ
熱心之ヲ經營シ、任ニ當リ、劃策宜シク、爾來、意
今日隆昌ノ基礎ヲ築クニ至ル、昭和三十四年二月、偶
テ不幸ニ、其職務劇忙ニ、一身ヲ賜フ、十四年二月、偶
勤勵シ、遂ニ其職務劇忙ニ、一身ヲ賜フ、十四年二月、偶
得シ、遂ニ其職務劇忙ニ、一身ヲ賜フ、十四年二月、偶

目次

吉澤先生御遺稿	大西 確	(1)
吉澤先生を偲びて	坪井 栄	(23)
志のふ草	三宮 宇佑彦	(30)
吉澤先生を偲ぶ	高橋 昇一	(31)
偶感	高橋 寿太郎	(33)
吉澤精神の一元的帰結	野村 一介	(35)
故吉澤徹先生御遺族挿へ	青木 正一	(40)
吉澤校長の御遺族をたづねて	森 千 耀	(42)
吉澤徹先生	岡田 一 郎	(45)
思ひ出	齋 藤 晴 海	(46)
吉澤先生に学ぶ		(49)
校長先生を偲びて		(52)

興國にて先生の逝去を知りて	伊井孝雄	(56)
吉澤校長先生を慕ひて	小宮登志雄	(58)
吉澤先生と偲ぶ	飯田眞大	(61)
慕	山本辰彦	(63)
追想	本江清	(66)
吉澤校長先生	桑田常太郎	(68)
吉澤先生を偲びて覚悟を新にす	田島達夫	(70)
春の淡雪		(71)
追慕	羽毛四一郎	(79)
その日	中川哲	(80)
故吉澤先生に暮ぐ	力丸寛	(85)
追悼座談会		(90)
追悼録作成賛同参加者芳名		(102)
後記にかへて		(104)

先生御遺稿

左に掲ぐる一文は先生が昭和三年頃書かれたる入學試験一掃私案の中より目次及び當初の部分を取録したものです。先生多年の御主張通り學科試験が廢止せられたにも拘りませず、依然としてそれが地獄の名を以て呼ばれて居ります取今、人に先んじてそれを主張し実行せられた先生の御高説を此処に掲げますことは先生をお偲び申し上げる以外にも多くの意義あること、信じて居ります。何卒御精讀下さい、先生の面目躍如たるものが御座います故。

入學試験地獄一掃案

一 各種の入學試験地獄對策意見とその是非

入學試験が、所謂「入學試験地獄」として、社會の人々の視聽を集め、子を待つ親の心を寒からしむるに至つてより幾星霜、今又重大なる社會問題として騒がれましたのも、つい此の間のことの如くに思はれますに、早入學試験の時機が眼前に迫つて参りました。

しかもあれ程ゴツタ返しましたにも拘らず、未だ入學試験地獄が一掃せられたと太ふことを聞かないのであります。

それで何とかしなければならぬと思ふのですが、彼等この入學試験地獄救済のためには色々な意見、方法が唱へられてゐるのでありますから先づ簡單にその主要なるものを紹介し検討致しまして私案の説明に資したいと思ひます。

第一 入學試験撤廢論

第一に、入學試験を撤廢して一舉に入學試験地獄を一掃せんとするの意見が

あります。が併し、試験は事實上撤廢出来るものではありません。試験は人のこの社會に生を享けてより、最後にその棺を覆ふに至る迄、始終ついで廻るもので、吠々の聲をあげるや、直ちに育つが育たぬか、強いか弱いか試される成長する、仕事に堪へるか堪へぬか、信用するに足るか足らぬか、試験せられる。現に人力車夫になるにも、警視廳から株式取引所へ行き、更に上野の博物館に至る最短の道順如何といふが如き問題に及第しなければその鑑札も下らぬ有様であります。若しこの社會に於て試験してはならぬと存りましたならば世の中のことには、危険で不安で、一つも確實に仕事が出来ないことになり、即ち人が社會を結成してゐる以上、試験は社會人の不可避的の運命、運命 宿命宿命 であり、しかも、この社會に於ける他の数限りのない試験に付いては忌はしい、可試験地獄地獄なるものなく、たゞ學校の入學試験のみ、地獄を以て呼ばれるといふことは大に考ふ可きことではなかつたと思ひます。

即ち、入學試験の、地獄たるの因は試験そのものにあるのではなくて、試験を実施する方法にあるのではないかといふ疑が生じてくるのであります。現今多くの學校に於て行はれております試験方法は主として答案による試験、詳しく申せばその答案に現はれたところを以て直ちにその學力実力を認定

するのであります。處が試験に出る事柄の百中の九十九を知つてゐる者と、残りのたゞ一つを知つてゐるものとが同時に試験を受けました場合、よし知つてゐる事柄がたゞ一つでありましても、出ました試験問題が丁度その一つでありましたならば、その人は満点、百点を得、その一つが九十九以外でありました時は、九十九を知つてゐてもその人は零点に甘んじなければならぬのであります。これは極端の一例であり、又試験の方法も随分工夫されてゐるやうですが、矢張り答案を學力なりとする不合理は免れぬのでありましてかゝる不合理が何人の疑ひをもひき起さなかつたといふこと自体甚だ不可思議に思へるのであります。之が所謂「習慣は明理に悞り」するとしても申すので御座いませう。

第二 全部抽籤論

以上申しました入學試験撤廢論に關聯しまして全部抽籤に依つて及落を決しべしといふ論が生じてきたのであります。この説の根本理由の一つとして先にお話致しました如き旧來の試験方法によつて表はれたる結果がその實力學力ではなく大部分、單なるチャンスによつて支配せられてゐるといふことが擧げられてゐるのであります。此の説の如く全くチャンスに依頼し籤を以て及落を決す

るとしましたならば、或は入學試験準備教育の弊は之を救済することが出来るかも知れませんけれども、偶然に依據すること大ならば大なるだけそれ程不安を増し、地獄なることに變りはないと思ふのであります。殊に、怠惰の風を培ひ、神社佛閣と耽りして僥倖の幸運を夢みるが如き射倖心を助長し、一層甚だしく國民教育たる小學校教育を破壊するの危険があるのであります。實にかゝる意見は、所謂羨に懲りて膽を吹くの類であつて、教育家は勿論、眞實に子弟の教育を惟ふ父兄の極力排斥しなればならぬところであらうと思ひます。

以上申しました如く、試験の撤廢は云ふ可くして行はれない。全部抽籤を以てしても試験地獄は一掃せられない。そして

第三 試験問題平易化論

試験問題の平易、常識化といふことが頻りに唱へられ、今春も、所々で実施せられたのであります。此の方法実施の結果は、却つて、此の案が試験地獄を一層深刻にするの「名案」たりしことを證明したのであります。

例へて申しますれば、「伊勢大廟に付きその知るところを述べよ」と云ふが如き問題が課せられたと致しますと、一見之は全く常識であつて、斯の如き平易

を常識的を問題に對しては少しも準備教育の必要なく、試験地獄は一掃せられ
たかの如く考へられます。けれども、入學試験は競争試験で御座いますからし
て、之を受けるものよりすれば、今年に伊勢の大廟が出たから明年は香取、鹿
島神社に付て尋ねられるかも知れない。否、出雲大社かも知れない。或は宇佐
八幡宮だつて試問の可能性大あり。更にその神社に關する歴史的事実も知らぬ
訳にも行くまい。と云ふ有様で、今迄は教はつた教科書を徹底的に勉強してお
けば、兎も角一通りは安心が出来たのであるが、今度は調べるにも、勉強する
にも、その対象、範圍が判らないといふことになつたのであります。鬼もこわ
い、蛇も怖ろしい、けれども、鬼なら鬼、蛇なら蛇とその眼前に現はれるもの
が定まつておれば、諦めるとしても、逃れるとしても何とか考のつけ方もあり
ますが、鬼が出るか蛇が出るか、それさへ判らない不安、焦慮、恐怖の増大、
之が問題簡易にする試験地獄救済策の「功績」であつたのであります。當時
既に非常に問題になつたのであります。殊に極端に問題を平易にすれば差等は
つけ悪くなる、差等がつけ悪くなるやうな試験をするならやめた方がワイズで
はないか。

第四 學校増設、公私差別撤廃論

以上述べました他に、もう一つ、可公私立學校の増設を計り且つ各學校を甲乙
なきまでに設備を完備し、志願者全部を收容して試験地獄を一掃せよとの主
張がありますがこの論は恰も、電車の増設によつて、ラッシュエアワーカーの乗客の
混雑を防ぐことが出来るとか或は又人口問題は食料品を増加すれば解決すると
かいふと阿断でありまして、云ふ可くして行はれざるところであるのでありま
す。殊に試験地獄の地獄たる所以は學校数の不足にあらずして入學志願者が或
る一枝に偏集することと試験準備との中に存するのであることは現実に入學試
験に當つたものの甚しく認むるところであります。で、この學校増設、差等撤
廃論は往々にして入學試験の實際經驗なき人々に依つて提唱せられ勝ちである
が、入學試験地獄の問題は悠々乎としてか、一般教育論的理想の實現を待望
すべく余りに現実的にして急を要する事柄であるのであります。然らば如何に
すればよいのか、僭越のやうであります。私に是なりと信じ且つ今春実施致し
ました入學試験地獄一掃に關する私案を述べて諸賢のお批評御叱正を仰ぎたい
と思ひます。

二 入學試験地獄一掃に關する私案

私は一度奥屋の店先にある、あの蝋を生補にしたことが御座います。何が始末に函ると申しましたも、蝋位始末に函る代物はありません。吸付く、捲付く、頭を叩かうとも、尻を擲りまして、どうにも、こうにも始末におえない、ところ私が私の困つてゐる様子を傍で見て居りました船頭が、箸でグイ、と蝋の西の眼玉を突きました。するとさしも大暴れに暴れてゐました蝋が一溜りもなぐへたばつてしまつたのであります。

入學試験地獄も之と同様でありまして、急所があります。しかも蝋の眼球のやうに二つあります。この急所を外しましては、如何に頭を叩いたり尻を擲つたり致ししても、此の地獄を一掃する事は覺束ないと思ひます。

既に検討致しました色々の解決意見、方法は、皆この急所を外れてゐるが爲に今日に至つても未だ地獄の呪が飽えないのではないかと思はれます。

それでは、入學試験地獄の急所は何処にあるか、何処をつ、つけばよいのか、私は、その一つは試験をする側、即ち學校側に、もう一つは試験を受ける側、即ち家庭側にあると思ふのであります。

第一 試験する側に於ける急所

(一)入學試験方法改正試案

或る文部行政にたゞさわつてゐられを大官が、日本では學校は進んでゐるが、教育は進んでゐない」と申されたことがあります。これは甚だ妙を太る方の方のやうですが、私は現代我が國の教育に對する味は、いふべき言葉であると思ふのであります。我が國教育の形式的方面、例へば校舍の建築に對して見ましても、決して歐米に比して遜色はありません。が條し、その立派な建物の中で行はれて居ります教育自体にいたつては、遺憾下らなさ、か時代錯誤の観がないでもないかと思はれるのであります。丁度人をして上等の饅頭の皮へ包まれた粗悪なる餡を味はされた時の如き感を懐かしむる莫がないでも、ふいやうであります。一例を挙げて見ますと、印刷術に、或は又寫眞電送に、その文明文化の最高度にある今の世に、道德思想涵養に於て重大なる意義を有してゐると稱せられ、漢文の講義が、但徠、仁齋時代の方法に少しも変らぬ教授方法のもとに時間がか少いからと云つて恰も洋服店のサンプルに類する教科書が講義せられ、之で漢文を教授せりといふ有様である。今少し工夫ありやうと思はれる。又講義を習つたと云へば必ず上手下手は兎に角、諸へるが、英語は習つたが、読めない、書けない、判らないと云ふが如き教授方法が平然として行はれてゐる。丁度相手を授けけることも倒すことも出来ない柔道を習つてゐるといふが如き教授方法

が平氣に行はれてゐることを往々見受けるのであります

しかも一面に於て、生徒のナヨツトの粗忽を理由に直ちに斬捨御免、退堂
或は生徒の素行に關して無名の投書が舞ひ込む。其方儀風聞不宣領内阿呆辨申
付く。るといつた様を即時諭旨退学或は教等が命ぜられて何等抗弁も釋明も許
されぬ、それで所謂教權の神聖を擁護保持し得たりとして得々然たるの弊の未
だ一掃せられざるものもあるのであります

かゝる教育者心理、態度よりしまして、前にお話しました様を實力、學力の
確實に判らなひ答案によつて差等をつけ順次点数の高きものより採用し、所要
入負に充つれば他を切り捨つると云ふ風の試験方法が、モトゼの十誡の如くに
遵守せられてゐるのではないでせうか、此の試験方法は殺到して参ります入
学志願者、殊と落第した者よりの抗議や苦情の出ない様、或はそれ等の者を諦
めさす方法としては妙案であるかも知れませんが、余りに機械的であつて旧態
依然進歩なしと云はれても仕方がない様に思はれるのであります

尤も時代と遅れ勝ちなものととして非難せらるゝ、諫言に於てすら、維新前の如
く罪人を拷問で白状させ、その口供をとつて、罪実、罪の有無を問はずして、
機械的に断罪するが如き態度を捨て、現時の刑事訴訟法では、司法警察官の搜

査豫審を経を上と更に公判手續によつて自由なる弁論をなさしめて裁判するや
うになり、殊に刑事、民事訴訟何れに於ても機械的を畫面審理から口頭審理に
進み、是等の材料を参考として、裁判官は自己の自由心證によつて裁判するこ
とと大方各位の夙に御承知の通りであります

裁判手續に於てさへ右の如くでありますに、獨り入学試験に於て、實力如何
を顧みず、答案によつてのみ差等をつけ所要入負以外は之を切り捨てるといふ
が如き機械的方法を固守しなればならない。特別の理由があるものでありませ
うか、甚だ了解に苦しむのであります。私は、或は入学試験地獄の急所の一つ
は此処にあるのではないかと考へるのであります。即ち旧体依然たる機械的試
験方法を改むることが入学試験地獄なる怪物の急所の一つの眼を射止めること
になるのであると信するのであります

文部省が昨年規定を改定致しまして、學科試験を避け小学校校長の内申と口頭
試験によつて入学を許すや否やを決せよといふことになりました。之は旧式の
拷問式裁判方法及び畫面審理主義を棄て、新らしい訴訟手續に依れと云ふ一太
革新であつたのであります

然るに、折角の文部省の意圖も、之を實施する細則、手續法なき為、種々な

る誤解を生じ、却つて不安を高め地獄を深刻化された様を結果と存つての
ありまして、誠に遺憾に堪へないのであります。

そこで、私は、答案本位差等切り捨て主義の機械的方法を棄て、この試験地
験地獄の急所を射止めた積りで、自分の学校で実施しました試験方法を御参考
返に述べたいと思ひのであります。

私は、以上陳説しました立場よりしまして、本年三月行ひました入学選抜に
際しましては一切学科試験を行はなかつたのであります。

そして、先づ第一に、従来の試験方法のために痛々しく傷つけられてゐる入
学志願児童の恐怖心を除き、彼等の眞の才幹、本性を發揮せしめて、選抜の任
にある私共をして誤つて適材を逸することなからしむるために、職負と志願者
とが一堂に卓を囲んで茶話會を開き相共に談笑しました。これは、選抜の任に
ある者を旧幕時代に於ける代官が、その場所を白洲か何かの如く恐怖し慄へ上
るやうに習慣づけられて居りました児童の心を、児童本来の快活をそして氣易
さに帰らしめることに非常に効果があつたと信じて居ります。

右の茶話會によつて平常の氣察さに歸らしめた後、私が皆に聞かせました講
話に就いて紙に書かして見ました。勿論之は國語又は作文の考查ではなく、後

に行ひまする口頭試問による人物考查の一参考材料とするのでありますから、
漢字を知らなければ假名で結構、必ずしも文章に綴ることも要しない、和歌、
俳句、繪何れによつても宜しいのであります。

この児童の書きましたものと、願書と、小學校長の内申書によつて予め志願
者各自に對する口頭試問の方針をたて、この口頭試問に於ても、一切学科に
關る、ことを避け、應答の内に、その智能全般素質性行即ちその人物の鑑定を
したのであります。

以上の他に、体格検査を行ひました。

この体格検査は、之を分つて、動的体格検査と靜的体格検査とし、動的体格檢
査と申しますのは、將來実業家として活動し得る一人前の動作をなし得るもの
であるか否かを調べるのであります。これとても、所謂体操の考查ではありません
せんから、その上手下手の如きは問題ではありません。次に靜的体格検査とは
普通一般に行はれる体格検査でありまして、之に付ては特別の説明を申し上げ
ることはあるまいと考へます。

以上の如くに致しまして、数人の選抜委員の判定の結果を綜合しまして、
本校教育を受くるに適するものであるかどうかの立場から、志願者を、最適材

適材、不適材の三種に大別し、最適材と適材を合格者とし先づ最適材は無條件で入学を許可し最適材のみでは募集人員に満たなかつたものでありますから、その数だけ抽籤によつて適材中より採用致しました。勿論不適材の者は他校に行つて貰ひました。適材の部類に属する者で籤に外れた者は誠に氣の毒でありますけれども、答案とのみ現はれたる結果により一と二の差等を設けるが如き方法によらない以上、且つ収容人員が限定せられてゐる關係上この抽籤の方法によるの外に公平にして合理的な手段がないのであります。そこで、或は他校入学の都合にもと、その適材たりし旨を證しました合格証明書を希望者に與へ、此等の人々には他校入学その他に関し出來うる限りの便益を圖つたのであります。

右の如き考查方法により八百名近くの志願者全部を考查しまして九十一名の最適材を得たのであります。今日第二学期の授業を終りまして、之を調べてみますに、九十名は依然として優良生に属してゐるのであります。今春実行しました選抜方法に關して一層自信を固めておる次第であります。

そも、從來の如き答案に現はれたところを以てのみ査定する方法は、所持してゐる金の高を見て及落を決すると同様で、如何と禁じませうとも出來るだ

け多く詰込んで参るのは競争試験たる以上無理もないことであります。でありますからして、たとへ問題の平易、常識化をやりましても、それが学科の量を檢べる結果となります以上、恰も、紙幣や銀貨の持合を要しない銅貨のみで充分だと申し渡してみましたところが、二銭銅貨があるかと問はれて出せない、で落芽する、結局その所持せる金量を調べられ夫で及落が決するのでありますから、無理に苦しんで銅貨を詰込んでくると同様で、入学試験準備の撤廃は行はれず、入学試験地獄の一掃を期待することは出來ないのであります。繰返して申しまするが、入学試験の地獄たる所以は準備教育にあるのであります。この準備教育の廢止は僅にもせよ学科の量を調べる考查方法による以上、自己の乘れる船を持ち上げんとするの不可能なであります。

事物の認識判定はその対象物それ自体を観察するに優れる方法はないのでありますから、答案によつて機械的に審理判定をなすが如き方法を廢し、内申書等を資料として児童本人の人物素質を鑑定し當該校長職員の經驗則に訴へその自由なる判断によつて採否を決しましたならば、何を苦んで検べられもしない、学科の量を無理に詰込むが如き準備教育の愚をなすものがありませうや、或は世上往々小学校の内申書に粉飾誤謬ありとの非難をなしてゐるやうであります。

が、小学校長よりの内申書は実に六年間朝夕教育に従事せられたる人々の既取
判定せる結果であつて、重要な材料であります。が併し單に之に盲従の要はな
いのであります。又よし誤謬紛飾がありましたとしましても白を黒と報告せら
れる乱暴ありとは信じられませぬし、資料としては之に優るものありとも考へ
られないのであります。例を以て申しますれば腰狙では外れがあるかも知れま
せぬが、この資料の上に筒さのせて狙ふのであります。

或は更に、学科の量を見ることなくその児童の人物素質を鑑定するは至難の
ことであり、その生徒の將來を推測予知するが如きは不可能であり、甚だしき
冒險なりとお考へになるかも知れませんが、若し之が不可能であり、冒險なり
としますならば、身体検査の如き明日をも知れぬ人の健康生命を審査するが如
き、これ又甚だ不確なる、甚しき冒險と云はなければなりません。

たゞこの試験方法改正私案、即ち学科はその難易を論ぜず之を審査すること
なく、小学校長の内申書を資料として直接児童に應接し、當該学校長職員の
經驗則に訴へ自由にその人物素質を鑑定し、その学校の教育を受くるに適する
かどうかを判定して採否を決する方法は、或は中学校に於きましては、聊か
困難を感ぜられるかも知れないのであります。と申しますのは、現時の中学

校は御承知の如く事實に於て上級学校入学の予備校であります關係上、上級学
校が旧態依然たる間は中学校のみ之を改めることは煉瓦を下より崩すやうなも
ので差障ありと思はれなくてもありません。が併し、少くとも実業学校、女学
校に於いてはこの審査方法によつて入学試験地獄は一掃せられるのであります。

第二 家庭側に於ける急所

二つの急所中、家庭側に存しまする急所は何処かと申しますると、その一つ
は、失礼ではあります。が、世の多くの父兄が児童の入学致しまする学校を選
びにつきまして指導が充分に出来ないことに在ると思ふのであります。併し之は
無理のないことでありまして、養西ではギリシヤ、ローマ以来の制度が進歩し
たに過ぎないのであります。から、親の受けを教育と系統的、本質的にいつて大した変
化はないのであります。だから、父でも母でも母の母でも子弟の学校の選擇に
付て適當の指導が出来るのであります。之に反して、今日の我が國の教育制度
教育内容と云ふものは、全然養西のものに則つたものでありまして、維新前の寺
小屋、私塾のそれとは全くその系統、内容を異にして、木に竹を懸いだ体の有
様であります。

それでありますから、一般社会に、我が教育制度及び内容に付いて、所謂

教育の教育しをしなければならぬのであります。この「教育の教育」が徹しておらない、即ち各種学校の属する系統、内容が了解せられておかない結果、志願者は評判の高い神様に御参りにでも行く氣で押し寄せる。その御神体が何であるかを考へない、でありますからして、縁切りの神様と縁結びを祈願しておると云ふ珍現象を生じ、児童の將來を誤ることが非常に多いのであります。

殊に近來、教育を一の粧飾とさへ考へる父兄さへあるのであります。校舍が立派だとか、何処の某が入学したから自分の子弟もそこに入學せしめなければ恥だと云ふが如き噴飯に値すべき事柄を理由として可愛い、一生の出発点を誤らしめ、それで子弟に教育を施したと誇稱してゐる父兄が可成りあるのであります。

斯の如く児童の素質、性行及び入學せしむべき学校の内容卒業後の狀況を殆んど忘却して、無暗に誇込み主義の準備教育で鞭打ち駈り立て、評判の高い学校に入學させようとするから、こゝにどうしても忌はしい試験地獄が現出せざるを得ないのであります。實に父兄自身が試験地獄を助長し、その地獄に發見を迫ひ込み苦しめて居るのであります。

更に近頃著しい現象は中学校に志願者が備集することであり、これをどう

も前に申しました「教育の教育」の徹底しておらないことと児童の性狀に適する学校に入學せしめると云ふ立場をとらないことによるのであります。そこで私は、中学校以外の学校即ち実業学校、その中でも工業学校、農業学校に付てはその地理的又は特別な事情がありますから、商業学校に付きまして少し説明申したいと思ふのであります。

今度の中学校の改正案は二部になつておりますが、現在の商業学校教育は三部になつてゐると申してもおおいのであります。試に商業学校の授業課目を見ましても、一二年間は全然中学校のそれと同一であり、三、四、五年と進むに従つて單なる空理の代りに実學を教へ、今日一般社会人として習得しておかなければならない學問、技能を特別に附加して教育するのであります。従つて、商業学校に於ては、卒業後自家營業につくもの、又は各種の会社銀行官廳に勤めて卒業の翌日より実務に従事するもの、更に今日の商業学校卒業者は中学校の卒業生と同様上級学校に入學することが出来るのでありますから、此等上級学校入學志願者、この三種のものに三通の教育が適切に施されてゐるのであります。それですから、教育せられる商業学校の卒業生は上級学校に入學することが

出末なくても、明日の曰より社会に立つて会社に銀行に実務につく事が出来る
即ち商業学校の卒業生の前には会社、銀行、官廳、商店等は其の扉を開いて待
つてゐるのであります。それに反して、中学校の卒業生がもし過つて上級学校
に入学することが出来なかつた場合は全くの「ロース」ものになり、就くに職
なくして困窮してゐるといふことに、來春中学校に入学せしむる子弟を持つ父
兄は是非眼を注いでもらいたいのであります。よし又幸運にして上級学校に入
学が出来ましたとしても、その上級学校卒業後に於ける就職難は想像以上に深
刻であります。社会は恰もピラミットのやうなもので上となる程狭くその就か
んとする地位は少ないのであります。係り下位であれば座るべき座席は廣く多
いのであつて恰度這入りさえすれば電車内に立つてゐても降りる人あつてすく
座に腰を下し得ると同様一度内部に這入れれば上には易いのであり中
等教育は児童一生の岐路であります。この岐路に立つ子弟をしてその將來を誤
り入学難、就職難、而して生活難で永く苦しむる事のふさやう入学すべき学校
の選擇に付て十二分に留意せられんことを切望します。

以上申しました私の入学試験地獄一掃案は、要するに学校側に於ては、入学
試験の地獄たる所以は準備教育にあり、その準備教育は学科の量を考查するこ

との必然的結果たることを覺り、從來の答案による機械的方法を捨て、児童の

素質性行を鑑定しその学校教育の趣旨に照らしてその適否を決する方法を採
り、他方家庭側に於ては、その児童の環境、素質と入学せんとする学校に対す
る充分なる調査を以て適材を適所にと努めることの二つであります。

杉村楚人冠の近著、湖畔吟の中の「家傳のつげ物」といふ項に、岡崎邦輔さ
んがお國名物のカツラの塩辛をこしらへて、もう出来上つてゐるだらうと取り
出して見たら、折角楽しんでゐた塩辛にはうぢが一杯に湧いて手もつけられな
くなつてゐたのでそのまゝ、床下にはぶり込んでおかれた。それから一年許りし
て、何かのついでに、ふと取出して見たら、うぢは何処かへはひ出してしまつ
て如何にもなれ加減がよく上味になつてゐた。それでなる程塩辛のならし方は
かうしなればならぬと一年目に悟つたと女ふ誌が載つて居ります。

入学試験の問題も昨年の文部省の改正案を前にゴツタ返してから早一年経ち
ました。今年も塩加減のよい塩辛が味はれると思ひますが追々其時機になるの
で私の案を申上げて御批判をいたしき度く御清聴を煩はした次第であります。

吉澤先生を偲びて

大 西 確 郎

中学三年の時と言へば、随分古い話になるが、博物の時間に、雲丹の標本を見せて戴いた時の事だった。一人の茶目がビンの蓋をとつて、インクを流し込んだ。それ以来彼の姿を教室で見る事は出来なかつた。二三日の後、遂に彼は退校処分になつたのだつた。其の事件から彼の名前が生徒名簿から消え去るまで、僅かに二三日だったのである。相當暑かつたたと記憶するから、一学期の末か、二学期の事だつたと思ふ。彼は少くとも二年間は其の中学の空気が吸つてゐた筈である。七百三十日間統いて流れた彼の中学生たる命は、三日即ち二百四十三分の一の時間で遮断された。と云ふよりも死滅させられてしまつた。子供心にも、私は其れが余りに簡單で、残酷で、氣毒で仕方がなかつた。

小さい私の胸には憤激にも似た不満や焦燥にも似た不安の湧き起つた事を記憶してゐる。用器函の蓋が一点足りないために、一年を棒にして落第したり、英語の点が一点五分足りないために、等級に止つたりする様な事実が、分別ある先生と言ふ人々の間に何の不思議もなく公公然と行はれてゐたのである。私の不思議は此の事

實であり、私の不満は此の冷、仕打ちに對して、あつた。右の不安と不満は大學を卒業するまで、同じ様な事件に度々出遭しつゝ、依然として引續いた。厭な氣持だつた。今考へて見ると、學生時代比較的素直でなかつた。私の氣持も此んな事實と對照して見ると、解散出来る様な氣がする。

教育界に志望を向けた一つの動機は此の不滿の解決にあつた程にも考へられるし、又專攻学科も此んな氣持に支配されて決めた程に思ふ。

従つて生後の前途を簡單に始末する學校へは勤める氣にはなれなかつた。

丁度卒業の年、恩師吉沢先生を深川の教員小学校に御訪ねして、十年來の不安と不滿が解消された。それは先生の譽を突いて最初に出た言葉は、送葉退學懲罰で簡單に生徒を支配せんとする、一般學校といふものに對しての義憤にも似た雄辯だつたからである。

私の十年來探し求めたのは此れであつた。遂に私の働く場所は此處以外にはなかつたのである。

卒業を待たないで、教員小学校の仮校舎に十二月から學生服のまま、御手傳に行く様になつたに付いて、私の精神の動きには此人お事があつた。卒業して三商の先生になる時、私は三商こそ死場所だと覺悟した。死場所働く事の出来る幸福を喜ん

だものだつた。以來足掛十一年、三商は私の死場所であつた。死ぬる積りで働いただけ、随分型破りもあつた事と今更思出す事の多い次第でもあるが、然し私にとつては十年間死場所を働かして戴いた幸福に對し、今更ながら吉澤先生に對し感謝の念、切なるものがある。今考へて見ると、吉澤先生と一語に同時に死ぬるものと思ひ込んでゐたらしい。

遂に嚴肅なる神の摂理の前に幽明境を異にし、死場所を失つた。私は吉澤先生のいらつしやる所「生徒を殺さない」所を探し求めてゐる。

此度卒業生有志の人々により追悼の企あるに際し、私は吉澤先生と失つた。半月程前を思ひ出すのである。

私は或る修養團體より寄稿を依頼された事がある。丁度入学試験前の事で、大変多忙だつたが、断る事も出来ないの、其の日の宿直の先生の宿直を引受けて、入学考査に關する色々の用事を済してから——夜の一時頃からだと言つて記憶する——あの三商の事務室で「湧き出づる行の力」と題する拙稿を物した事がある。其れが印刷になつた雑誌を吉澤先生に御覽にされると、

「ホ、君も僕と同じ様な事を言ふね」と大変に喜んで戴いて、湧き出づる行の力について、一時間ばかり教を受けられた事がある。

此の事あつてから間もなく永久に御別れしなければならなくなつた。あの時が来たのであつた。私はあの時を思ひ出し度くない。

「僕と同じ様な事を言ふね」

此の御言葉は今猶私の耳に聞へて来る。丁度あの校長室のソファアに倚つて言はれた先生の面影と共に。

私にとつては此の草稿は実に感慨の深いものである。故に吉澤先生と同じ様な事を言ふ草稿を再び書いて先生を偲び度いと思ふ次第である。

「薄き出づる行の力」

或る大学卒業生が就職した所、煙草盆の掃除をさせられて「給仕の仕事が出来るものか、俺はそんな真似は出来ない」と憤慨したと言ふ款がある。又小學校時代には先生を神標の如く尊敬し、親に對しては全く柔順だったが、中学四年五年となつて、親の言ふ事などて人で馬鹿にして、理窟をばべて仕方がない。こんな事なら、中学へなと出すのではなかつた、と後悔する親も数々ある。人一倍大學教育まで受けあぶら、給仕風情の仕事へ出来ないと言ふのが、インテリゲンチユアの誇りであり、特權であつたりする。學問教育を受けるとつれて、人間が悪くなると言ふ一大奇怪事であつて、飯は腹一杯つめ込んだが、空腹で仕方がないと言ふ事と變りはない。

ない。

此の事実こそ教育のために高い費用や長い歳月が費されたのでないを派の證據なのである。現に入学試験で多数の志願者の中から勝手に思ふ通り、選擇して入れて置いて一年たつと駄目だから落第だと子供を突落したり見込がないから退学だと、何の不思議もなく子供を離縁してゐる。自分の腹を痛めた子を憶面もなく家から追放してゐる始末である。

然し落第すべきは、落第さす方であり、退校させなければならぬと考へる者こそ縁なき衆生と言ふべきであらう。自分達が見込んで入学さした者を、唯かうして駄目だと判定する事が出来る程、人間も吾氣に且つ圖々しくなれば長生きするかも知れぬが、人の子の教育など思ひもよらない事である。

論語に「果武末之難矣」と言ふ句があるが、正に其の通りで、吾々の再考すべき事である。

自然に立派におれるのなら誰れかわざ／＼學校へ入り苦勞し様と考へやうか。出来ぬからこそ教はらんとするのである。それを落第だ、退校懲罰でやるのは教育ではなくて脅威苦である。

脅威苦の立派に行はれてゐる所に教育の行はれる筈はない。

今更教育とは、
 教育勅諭に嚴としてゐる事であつて、國體の精華は皇祖皇宗の淳厚なる御樹徳と、臣民億兆一心の忠孝との絶對融合統一である。深厚なる御樹徳とは、日本精神の絶對模範としての國家國民への奉仕的御精進に外ならない。おほみどからしの言葉こそ、この有難き御精進があつて生れる言葉である。明治大帝の罪あらは吾とがめよ、の絶對御奉仕の大御心に對し奉り、苟も生を言ける日本人といふ日本人は絶對自己戒却の奉仕なくてはすまふのである。此處に教育も亦其の源を持ちねばならないのである。

「敢て死を賭して」と言ふ事があるが、一度性死ぬるだけでなくて、七度重ねて死んでも君國に盡さんとする、楠公の絶對忠誠は此の絶對の自己戒却の奉仕であり、自然當然必然に湧き出して来る日本人の心情である。

單なる唯の心情ではなくて、絶對に必然的に行せすにはおれない行である。世々碩の美を著せる我が國體の精華は即ち此の感謝感激の極致として、自然當然必然の一心の行の集積である。

人間が十人二十八集つてさへ、唯では仲々一心になり得ない事案が多いのに、それとは比較にならない徳性が一人心より纏子は上の絶對御奉仕に對する人間の自然絶對

對感銘あるが故である。此れこそ教育の淵源とすべきものである。

教育は實に此の精神によつての学校、先生の絶對自己犠牲的奉仕に對する生徒の自然的感奮興起の嚴肅なる事實の現出でなければならぬ。

おほみどからと生徒を考へる精神の前に生徒は全く風に必ず偃す草である。此の精神は生徒に對し生殺與奪の絶對力である。従つて生徒に強要すべき何ものもない筈である。学校が先生が、自己に對する絶對自己否定への強要をこそ無理にもしなければならぬのである。

世に所謂教育として唯外面的に單なる行動や勤勞をさす事はその第一義的のものゝの如く考へるものありとせば思はざるの甚くさものと云はねばならない。自然にせざるを得ずらしめるのである。行を湧き出さすのである。

此の湧出力は人間に響へられた絶對の力であり、自然であり、當然であるから、荒れ狂ふ獅子の前にも決然として子を散ぶ、か弱き母の行が出て来るのである。唯理屈や文字で此の行は決して出るものではない。